



開墾奨励

吾家ノ興ニ際ス此ノ地ニ年ニアリ
努力セザルニ干拓事業ヲ為シ倒レベシ

熱ノ狂時代ニツキ

唯其事ヲ成シ得レバ如何ニ愉快
ナルベカラシ思ヘ



令和8年7月8日(水) ▶ 10月4日(日)

午前10時～午後4時30分 月曜休館(祝日の場合は翌日) 入館無料

展示解説 7月11日(土) 午前10時30分から

事前申し込み不要直接ふるさと歴史館にお集まりください

石岡市立ふるさと歴史館 第45回企画展

開墾奨励ノ熱狂時代ニツキ

目次

はじめに	1
八木の干拓事業資料群	2
八木の干拓に挑んだ人々とその背景	3
霞ヶ浦で最初に動き始めた干拓事業	7
干拓事業を支えた組織・人・技術	13
八木の干拓のその先	23
おわりに	24

◆例言

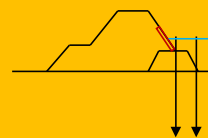
本冊子は、令和8年(2026)7月8日～10月4日を会期として開催する石岡市立ふるさと歴史館第45回企画展に際して作成したものです。

展示及び本冊子の編集・執筆は、石岡市教育委員会 文化振興課（竹内智晴）が行いました。

展示にあたっては石岡市史等、多くの文献を参考としたほか、羽成家で作成されました以下の資料等を参考とさせていただきました。

羽成卯兵衛『霞耕地整理地区の沿革』 昭和27年頃

はじめに



「汝一大困難ナル事業ニ出会ヒシ時ハ其事業ノ難キヲ思フコトナカレ而シテ唯其事業ヲ成シ得シ日ノ如何ニ愉快ナルベキカヲ思ヘ」

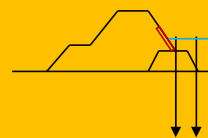
これは今からおよそ 100 年前、大正期から昭和初期にかけて手がけられた「八木の干拓」の事業日誌冒頭に記された言葉です。この心構えを書いた人物は近代の高浜地区を代表する商家の 1 人である羽成卯兵衛です。羽成卯兵衛は米騒動など食料問題に揺れる社会を「開墾奨励ノ熱狂時代」と受け止め、「吾家ノ興廃ハ此ノ拾ヶ年ニアリ」という並々ならぬ決意で近代最初の霞ヶ浦干拓に挑みました。

羽成卯兵衛は八木の干拓に関する多くの資料を残しており、昨年度からその保存処理が始まりました。今回はそれらを紐解くことで、競合する計画や軟弱な地質などの立ちはだかる障害を、多くの人や技術を集め越えていった近代地域開発のドラマを紹介します。



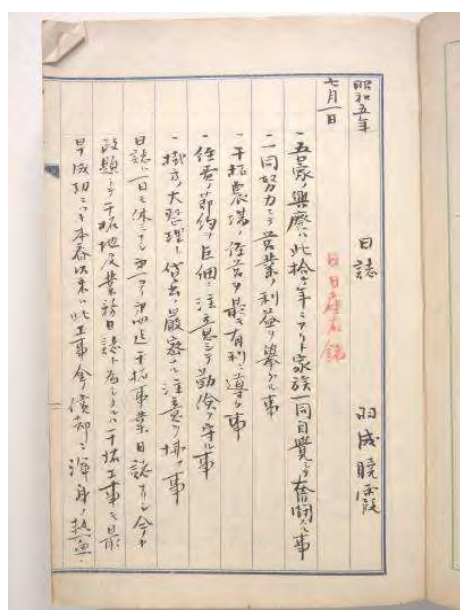
↑ 八木の干拓遠景 北西から

八木の干拓事業資料群



八木の干拓事業に関する史資料は総数 1,000 点以上に及び、現在は石岡市に寄贈されています。過去の市史編纂事業等でも利用され、石岡市史中巻Ⅱに干拓事業日誌の一部が掲載されています。資料群は干拓事業に関する各種申請書類や設計書類、帳簿類、日誌等で構成され、事業の開始から工事中、完成後の災害対応まで一貫してわかる良質な資料群です。

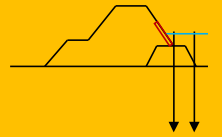
特に注目される資料は干拓事業日誌です。全部で 6 冊あり、大正 9 年 2 月 9 日から昭和 9 年 10 月 17 日まで記録されています。1 冊目から 3 冊目までが「埋立事業日誌」、4 冊目が「干拓事業日誌」となっており、事業準備段階から工事が一段落するまでの内容となっています。5 冊と 6 冊は「干拓地及業務日誌」と変化しており、工事から農地経営へ主眼が移ったことを示しています。中身は事業に関する活動が記録されていることに加え、「深更まで祝盃を挙ぐ」などその時々的心情がうかがえる記述が随所にあり、難事業に挑む様子が鮮明にわかる貴重な資料です。



←干拓事業日誌 昭和 5 年 7 月 1 日

日誌の冒頭に「吾家ノ興廃は此拾ヶ年ニアリ」と書かれており、家の命運をかけて干拓事業に挑んでいたことがわかります。干拓事業日誌には訪問した相手先や協議した内容等が細かく記録されており、事業の進行を立体的に復元できます。

八木の干拓に挑んだ人々



八木の干拓に挑んだ主要人物は、「羽成卯兵衛」と「猪瀬蔵太郎」、そして工事を請け負った「海東惣一郎」の3名です。

羽成卯兵衛は明治6年、新治郡美並村根本（現在のかすみがうら市）で今宮家の次男として生まれました。兄の今宮牧之助は、大正4年刊行の茨城人名辞書に「新治郡美並村の富豪、温厚篤実の人にして深く意を公共事業に注ぐ、現に村会議員の職を帯び、村治に^{じんすい}尽瘁せり」とあり、生家も地域経営に熱心であったことがうかがえます。

茨城県尋常師範学校を卒業した羽成卯兵衛は、明治30年に高浜町で醤油醸造業や米穀・肥料販売を営む羽成家の養子となり、明治38年に家督を継ぎました。羽成家の商品では「開運」銘柄の醤油が知られています。羽成卯兵衛の活動は幅広く、高浜倉庫合資会社を設立し、また加波山鉄道監査役を務めるなど物流分野への進出を図っています。また、高浜農商銀行取締役、五十銀行監査役、茨城無尽株式会社監査役を務めるなど金融分野でも活躍しました。商業以外では、高浜町会議員や学務委員、消防組頭を務め、昭和7年に刊行された『茨城人名辞典 再版』によれば老後は教育に関わることを考えていたようです。



↑羽成卯兵衛
石岡市史上巻より引用



↑羽成家で使用されていた
開運の商標

猪瀬蔵太郎は羽成卯兵衛とともに八木の干拓の共同施行者となり事業に挑みました。明治5年に生まれた真壁町大字真壁（現在の桜川市）の人物で、大正4年刊行の茨城人名辞書には、中世に佐竹氏や真壁氏に臣従しその後真壁に土着したという猪瀬家の由緒が書かれています。猪瀬家薬医門は国登録有形文化財となっています。

猪瀬蔵太郎の職歴としては、明治34年に真壁町会議員、明治40年に茨城県会議員に選出され、大正元年からは真壁町長を務めるなど、明治後期から昭和初期にかけての真壁町の中心人物として活躍しています。また、羽成卯兵衛と同様に多方面で活躍しており、真壁銀行監査役や筑波鉄道取締役・監査役、筑波山鋼索鉄道監査役なども務めています。

海東惣一郎は大正11年から八木の干拓工事を請負い完成に導いた人物です。明治23年に生まれ、水戸農学校で学んだ後、地元三村で農家経営に取り組みました。農家経営が評価され大正5年から7年にかけて茨城県から農家経済調査委員を委嘱されています。昭和22年には三村村長に就任しています。

八木の干拓に関わることとなる契機は、大正8年から9年にかけて行った自身の所有する湿深田に対する土地改良工事です。この工事は羽成卯兵衛たちの関心を惹いたようで、海東惣一郎が羽成卯兵衛のもとを訪問した際に作業員の賃金や日毎の作業量などの工事に関する内容を聞き取っています。こうした工事の経験が評価され、干拓工事に参加することとなりました。



↑ 猪瀬蔵太郎
茨城人名辞典より
引用

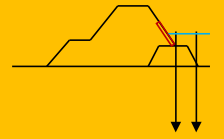


↑ 猪瀬家薬医門



↑ 海東惣一郎
石岡市史上巻より
引用

開墾奨励ノ熱狂時代



「開墾奨励ノ熱狂時代」は、羽成卯兵衛が八木の干拓事業を計画するにあたり大正期の日本を評した言葉です。

日本では明治 32 年に耕地整理法が制定されました。これは形もばらばらで各地に分散した農地を整理・集約することで効率化をねらったもので、農業の近代化を目指した最初の一步です。同法は次々と整備され、明治 38 年の改正で灌漑排水かんがいが追加、明治 42 年の全面改正で主目的が区画整理から灌漑排水に切り替わるとともに開墾事業が組み込まれ、大正 3 年には埋立・干拓も加えられています。この耕地整理法の変化から、当初農業の効率化が求められ、次いで農地そのものの拡大が求められたことがわかります。

耕地整理法の整備には、明治を迎え「富国強兵」のスローガンのもと近代国家への変化を推し進めていた日本では、工業の発展がとても重要視されたことが関係しています。工業に人手を回すために農業から人員をもらうことになると、当然農業の担い手は少なくなります。また、農家の数が変わらない場合でも、農業以外の仕事に従事する人口が増えれば、増えた分の食糧を多く作る必要があります。そのため、生産効率を維持・向上するために牛馬耕など農業技術の改革が進められ、その導入のために不整形・小規模の農地をまとめようとなりました。また、明治後期から大正期は日露戦争から第一次世界大戦へと進む時期ということも関係しています。戦争には多くの人が動員され食糧も必要となりますし、国外から安定的に物を得ることが難しくなります。これらのことから食糧供給は不足・不安定化し価格の上昇など社会問題となり、最終的に大正 7 年の米騒動として爆発することで翌年の開墾助成法制定などさらなる農地拡大推進につながっていきました。

	石岡町			高浜町			三村			関川村			合計		
	戸数	農家数	農家比率	戸数	農家数	農家比率	戸数	農家数	農家比率	戸数	農家数	農家比率	戸数	農家数	農家比率
明治42年	2507	1378	55.0%	598	374	62.5%	382	361	94.5%	364	287	78.8%	3851	2400	62.3%
大正2年	2460	984	40.0%	604	475	78.6%	382	357	93.5%	370	354	95.7%	3816	2170	56.9%
大正4年	2513	994	39.6%	612	489	79.9%	406	367	90.4%	375	354	94.4%	3906	2204	56.4%
大正6年	2600	986	37.9%	627	489	78.0%	405	368	90.9%	383	327	85.4%	4015	2170	54.0%
大正8年	2611	989	37.9%	630	489	77.6%	406	357	87.9%	390	334	85.6%	4037	2169	53.7%
大正10年	2978	989	33.2%	664	490	73.8%	401	365	91.0%	393	338	86.0%	4436	2182	49.2%
大正12年	2985	988	33.1%	674	485	72.0%	407	368	90.4%	393	340	86.5%	4459	2181	48.9%
大正14年	3190	986	30.9%	617	487	78.9%	436	365	83.7%	431	343	79.6%	4674	2181	46.7%
昭和3年	3327	993	29.8%	617	505	81.8%	438	367	83.8%	431	347	80.5%	4813	2212	46.0%
昭和5年	3395	998	29.4%	636	508	79.9%	427	342	80.1%	423	347	82.0%	4881	2195	45.0%

農家戸数推移（石岡市史下巻より抜粋）

当時の石岡市域南部の様子をみると、農家数に極端な変動はなく、戸数自体は増加していることから、戸数に占める農家の割合が減少しています。特に市街地にあたる石岡町で戸数が大きく増加しているので、商工業への従事する人々が増えていったものと思われます。農村部の状況としては、関川村の服部熊太郎など農業技術の普及・改善に尽くす人物が活動していたものの、明治44年に作られた『三村是』には従来の農具を引き続き使用していると書かれているなど、農地の改良や農具の改善はなかなか進んでいませんでした。このことから、市街地はふくらみ農村の生産能力は現状維持、といういびつな状態になりつつあったことがうかがえます。



↑ 服部熊太郎
石岡市史下巻より
引用

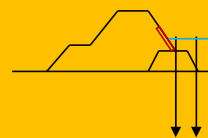


← 瓦会村女子農事講習会

集合写真(明治～大正期)

八木の干拓着手以前から石岡市域の各地で技術者を呼んでの講習会などが開かれており、地域として農業の近代化の要求がありましたが、思うようには進みませんでした。

事業の経過



霞ヶ浦の公有水面 63 町 9 反 9 畝＝約 635, 000 m²を対象とした八木の干拓事業の経過は大きく 5 段階に分かれます。

①事業計画 大正 7 年 10 月 16 日～

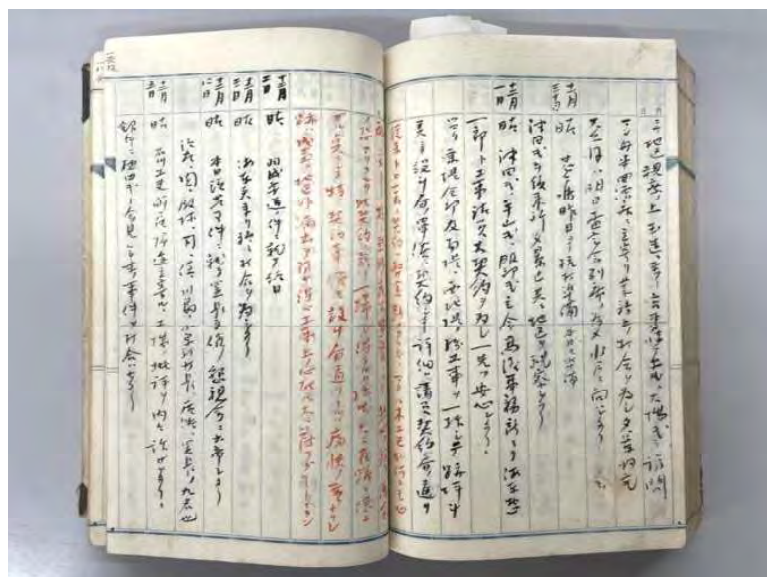
およそ 1 年半の期間があり、現地視察や事前調査等を行っています。また、関川村住民を対象とした事業説明を行い水面埋立免許を申請するなど事業の準備を進めています。

②工事準備 大正 8 年 11 月 21 日～

約 2 年間をかけ、資金調達のため住民から寄付を募り、また日本勧業銀行等と交渉を繰り返します。また、茨城県選出の衆議院議員や工事事業者・技術者と関係を構築し、工事の内容を練り上げていきます。

③工事实施 大正 10 年 11 月 10 日～

工事着手届を提出し、築堤工事に着手します。途中工事の難航を受け海東惣一郎と工事請負契約を結ぶなどしており、すべての堤防がつながるまでにおよそ 4 年半かかっています。



←干拓事業日誌

大正 11 年 12 月 1 日

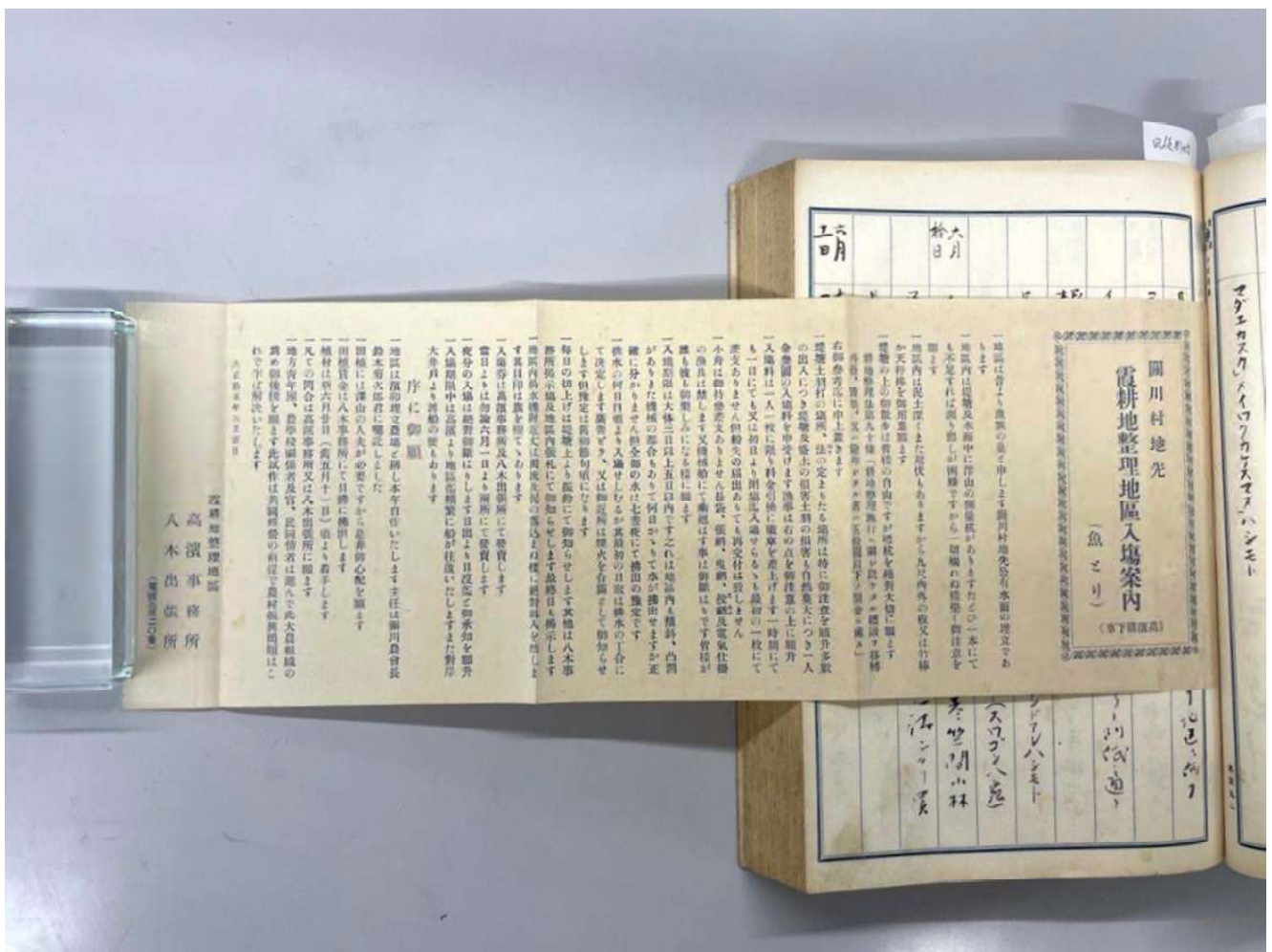
海東惣一郎と堤防全体の工事請負契約を締結したことで「大契約ヲ為シ一先ツ安心」と書かれています。工事が軌道に乗るまで多くの困難がありました。

④堤防完成 昭和 15 年 4 月 27 日～

堤防締め切り後、干拓事業地内の排水や水路工事を加え、大正 15 年 7 月 1 日から試験的に農地の利用を開始します。利用開始後も道路工事や堤防の改修工事等は継続しています。

⑤全体完成 昭和 5 年 7 月 1 日～

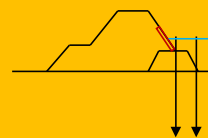
工事が完成し主眼が維持管理と農地経営へと切り替わります。完成後も昭和 13 年の台風や昭和 16 年の大雨、昭和 22 年のカスリーン台風など度々大きな被害を受けましたが、修復や改良を繰り返し現在まで続く農地となりました。



↑ 霞耕地整理地区入場案内 大正 15 年

堤防内部の排水時に残る魚を捕まえるイベントの案内です。高浜と八木を往復する汽船を用意し、大井戸からも舟を出すということから、盛大に企画されたことがわかります。地域の人々は霞ヶ浦を切り取る長大な堤防に大いに驚いたことでしょう。

八木の干拓事業の開始



事業の各段階を調べていくと、前例のない事業に挑むための工夫や立ちふさがった困難などの特徴がみえてきます。

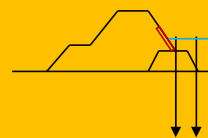
まず挙げられる特徴は動き出しの早さです。八木の干拓に関して最初に記録されている日付は大正7年10月16日です。この日、羽成卯兵衛と猪瀬蔵太郎、渡邊廣治の3名で関川を訪れ舟遊したことが日誌に書かれています。渡邊廣治は下妻町長や茨城県会議員を務めたほか、常総新聞の創刊者であり、息子である渡邊弘とともに事業の協力者として八木の干拓に関わっていきます。この時に干拓の事業地を八木と定めたものと思われ、翌年3月4日に茨城県へ耕地整理施行見込地区調査として技術員の派遣を申請するなど準備が進められていきます。



対岸の高崎から八木を望む

霞ヶ浦に浮かべた舟の上で具体的にどのような会話がなされたのかは書かれていませんが、干拓事業の夢を語り合ったのでしょうか。

霞ヶ浦で最初に動き始めた 近代干拓事業



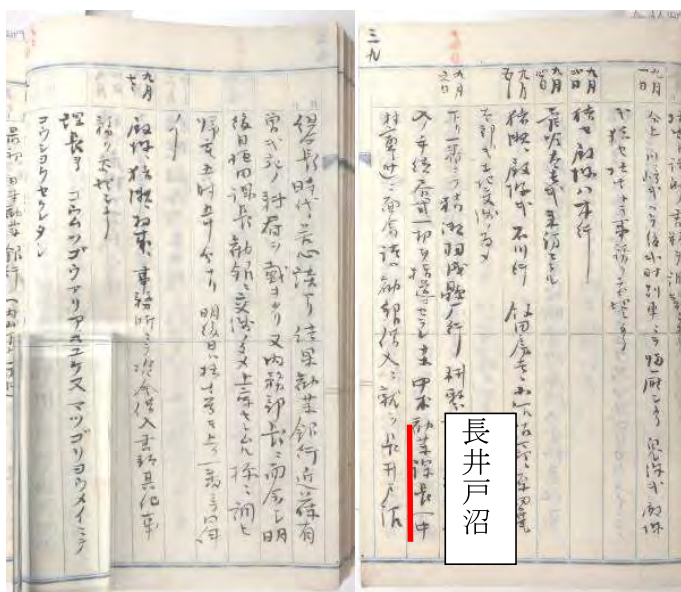
大正7年中の事業開始は、霞ヶ浦を対象とした近代干拓事業の中では最も早いものになります。

八木の干拓以前の県内の状況をみると、大正5年に開始した猿島郡の長井戸沼干拓事業など、大規模な農地改良・農地創出事業は散見されます。しかし、霞ヶ浦を対象とした事業の本格化は、大正8年の開墾助成法と大正10年の公有水面埋立法制定の制定以降であり、八木の干拓はこの活性化に先行して着手しています。米騒動が八木の干拓始動直前の大正7年7月から発生しており、食糧増産を求める社会の声がピークに達したことを敏感に感じ取っていたのでしょう。羽成卯兵衛たちの時代を先読みする能力の高さがうかがえます。

大正7年	八木干拓・小高干拓 潮来干拓
大正8年	開墾助成法
大正10年	公有水面埋立法
大正13年	高浜三村耕地整理地区
昭和3年	鰐川干拓
昭和4年	甘田入り干拓
昭和6年	本新島萩原干拓
昭和7年	野田奈川干拓
昭和8年	中ノ洲干拓
昭和9年	藤川干拓・沖宿干拓 内浪逆浦干拓
昭和14年	江戸崎入り干拓

霞ヶ浦周辺

近代干拓事業開始時期

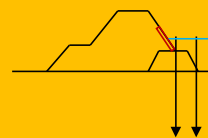


←干拓事業日誌

大正9年9月6日

茨城県から参考情報として長井戸沼干拓事業の内容を伝えられたことが書かれています。各地の農地開墾情報を集めながら、八木の干拓事業は進められていきました。

干拓一番乗りをめぐる競合



霞ヶ浦で最も早く着手された八木の干拓ですが、同様の計画を考えていた人物が他にも存在しました。

干拓事業日誌によれば、羽成卯兵衛と同じ高浜町の有力商人であった廣瀬慶之助が同時期に八木と現在の小美玉市大井戸を堤防で結ぶという壮大な干拓計画を立てていました。羽成卯兵衛たちの干拓予定地もその中に含まれていたため、大正8年7月21日に関川村民大会が開かれどちらの計画を認めるか激論となっています。最終的には羽成卯兵衛たちの計画が採用され、廣瀬慶之助の計画は練り直された後に高浜三村耕地整理組合として大正13年に開始されました。

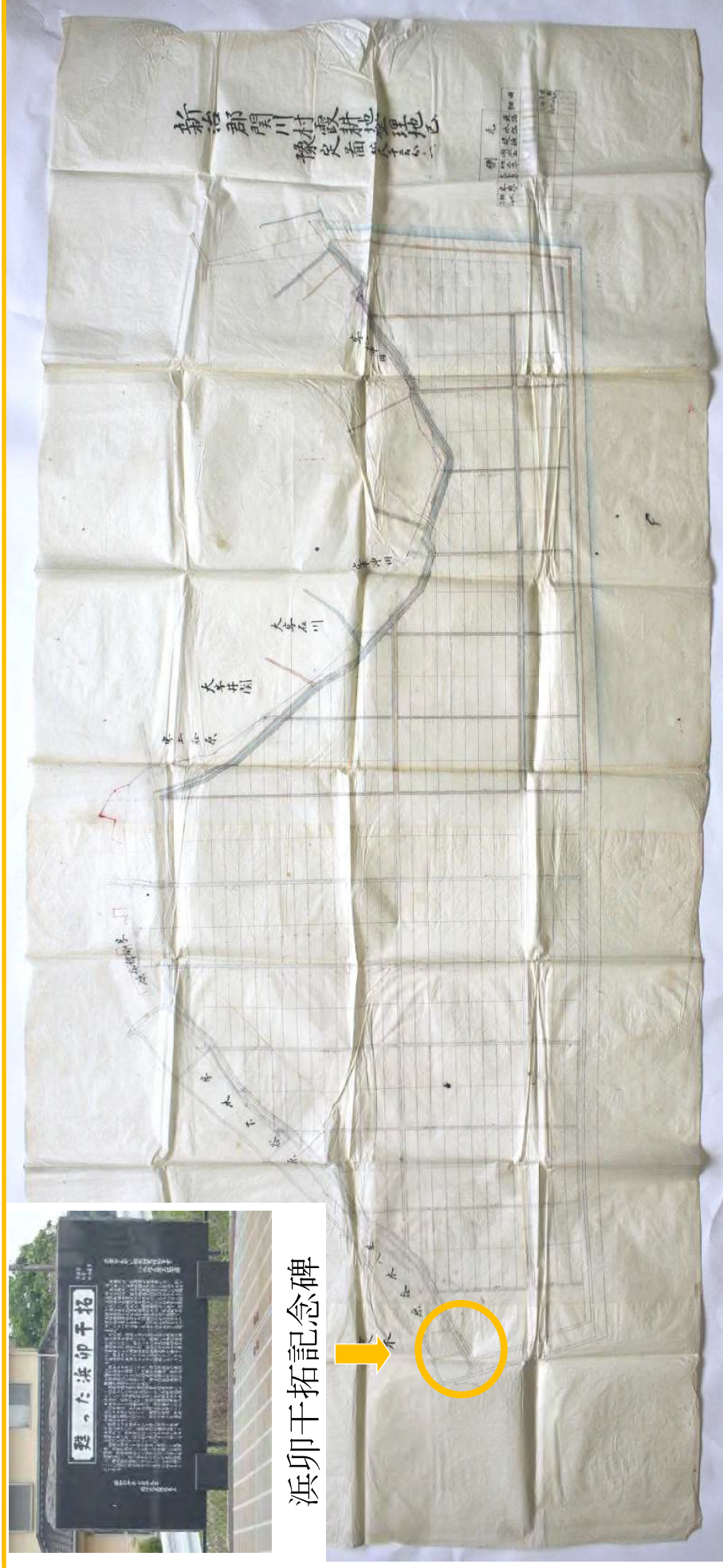
高浜地区の複数の資本家が同じ地域の開発に乗り出し競う点が注目されます。「開墾奨励ノ熱狂時代」にふさわしく、霞ヶ浦北部は開発地として注目され活発な動きがみられます。また、明治期には電気会社など地元の整備に集中して向けられていた有力商人の資金が、大正期には地元以外の地域に向かうようになる、という変化も特徴として見出せます。



八木と大井戸の間は約850mと霞ヶ浦が狭くなっています。八木の干拓に比べると短い距離の堤防で済みそうに見えますが、水深が深く、また流れ込む恋瀬川の扱いなども問題となることから、採用されなかったものと思われます。



浜卯干拓記念碑

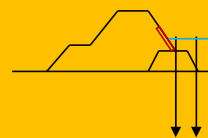


新治郡関川村霞耕地理地区予定図 大正後期

霞ヶ浦に張り出す形で堤防を作り、その内部を排水・埋め立てることで農地を創出する計画で、廣瀬慶之助による計画と比較すると小規模になっています。

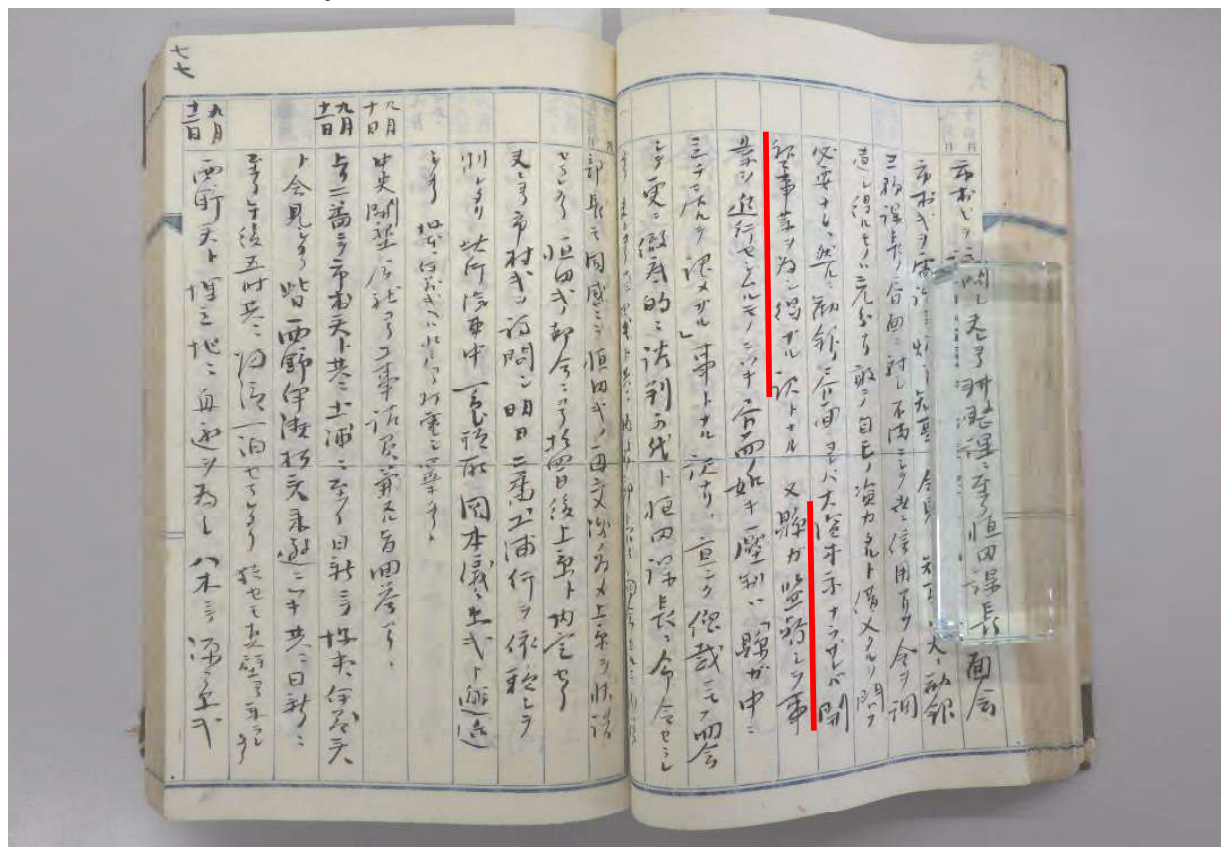
農地創出のほか、周辺地域の治水も目的とされています。霞ヶ浦沿岸部は増水による被害を度々受けており、農業の近代化を阻む要因となっていました。干拓工事ではそうした状況の改善も狙われており、工事範囲以上に広い範囲に影響しました。

官民共同の地域開発



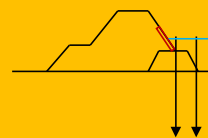
八木の干拓は多様な組織・人の協力を得て、また様々な土木技術を参考にすることで進められています。

まず、組織や人の部分では茨城県が中心的な役割を担っています。事業の初期段階にあたる大正8年3月4日時点で茨城県へ技術員派遣の申請が出されており、計画の初期段階から茨城県が組み込まれています。また、大正10年9月10日の干拓事業日誌に「県ガ監督シテ事業ヲ進行セシムルモノニツキ」とあることも茨城県も事業の中心にいたことを示しています。農地拡大・食糧増産は国家的な要求であることから、地域の資本家による事業の提案に対して、行政組織が技術面や資金調達、事業の進捗管理など全面的に協力する、官民共同の体制で取り組まれました。



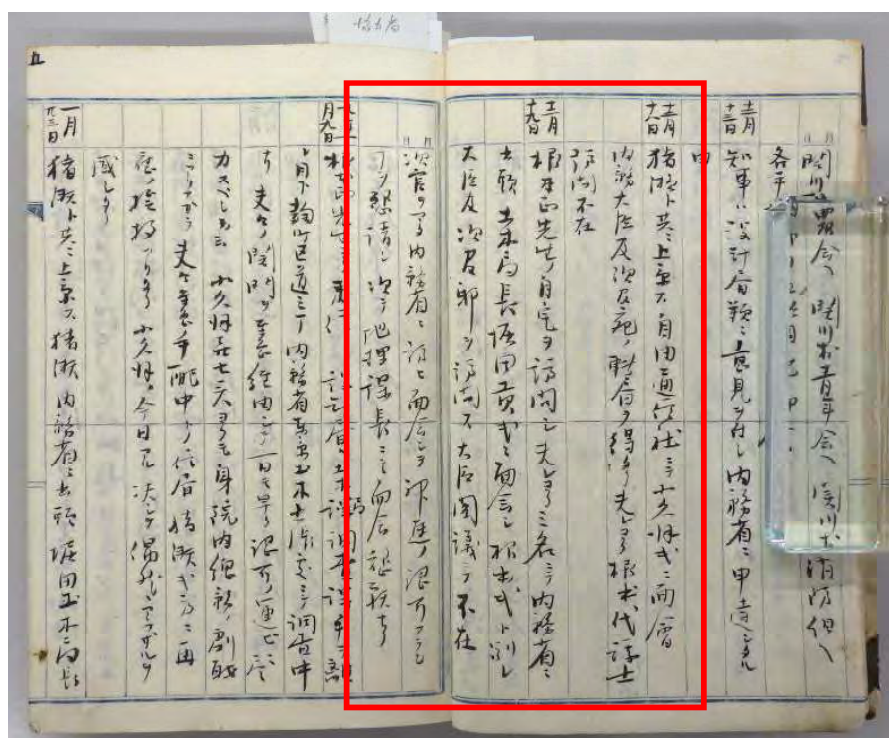
↑ 干拓事業日誌 大正 10 年 9 月 10 日

茨城県の総力で挑む



茨城県以外では、前述の渡邊廣治・弘親子の協力があった他、事業計画段階では大正8年11月15日に貴族院議員でもある実業家の竹内権兵衛を訪問しています。また、工事準備に入ると大正8年12月18日から19日にかけて茨城県選出の衆議院議員である小久保喜七と根本正を訪問し助力を得ており、また大正9年2月9日時点で当時茨城県会議員であり同年5月に衆議院議員に当選する市村貞造も協力者に加わっていることが書かれています。

これらの協力者は、中央省庁や茨城県内の関係部署との連絡・交渉、さらには鉄道工事などで実績のある企業との橋渡し役になるなど干拓実現の大きな後押しをしています。協力者の陣容から、八木の干拓が茨城県の総力を挙げて挑戦した事業であったことがわかります。



◀干拓事業日誌

大正9年12月18日・19日

同年11月21日に関川村会で事業実施が可決され、工事に向けた諸準備を進める中で東京を訪問しています。その際に小久保喜七からは内務大臣・次官宛書状を預かり、根本正とは一緒に内務省を訪問しています。

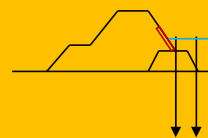
工事にあたっては、多様な分野から技術が集められています。同種の干拓事業では、大正10年1月15日に九州の有明海に関する設計書類を茨城県と共有しています。有明海は古代から続く干拓地として知られ、先進地として八木の干拓でも参考とされました。

[illegible]

九州農政局 干拓の歴史より引用

15

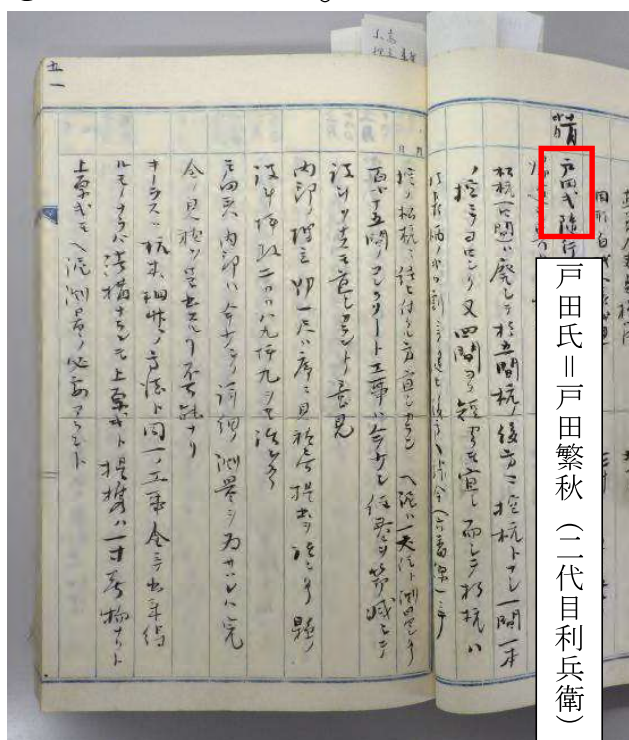
新技術の導入



干拓工事以外では、東京湾海堡工事も参考にされた可能性があります。

東京湾海堡は明治期から大正期にかけて東京湾内に設置された海防用の人工島で、深い水深で絶えず波も寄せる環境に築く工事は世界的にも難しいものであったとされています。

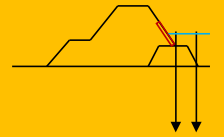
羽成卯兵衛は大正9年9月28日に東京湾海堡工事を請け負った日本土木会社を訪問しています。最も水深が深く難工事だったとされる東京湾第三海堡の完成が大正10年3月であり、訪問時期は間もなくその完成をみるというタイミングです。会見の席で羽成卯兵衛はその経験を伝えられたのかもしれませんが。日本土木会社はこの会見の翌日に技術者2名を八木の干拓事業地に派遣しています。木杭の設置方法などの工事内容について所見を伝え、当時最高峰の土木技術を石岡地域にもたらししました。



また、戸田組の戸田繁秋（二代目利兵衛）も高浜を訪れています。戸田組は鉄骨造・鉄筋コンクリート造に早期から取り組んだ土木事業者であり、慶應義塾大学図書館旧館などの建築を手がけています。八木の干拓に対してもコンクリートの使用を提案しています。

←干拓事業日誌 大正9年11月2日

鉄道とのつながり



日本土木会社や戸田組以外にも多くの企業・技術者が八木の干拓事業には関係しています。その中で注目されるのは、鉄道事業と比較的多くの関係を持っている点です。

日本土木会社も草創期から新橋停車場工事に関わり、現在の JR 中央線工事を請け負うなどしていますが、その他にも有馬組、西本組、下田組といった鉄道事業で実績を持つ工事事業者に相談しています。

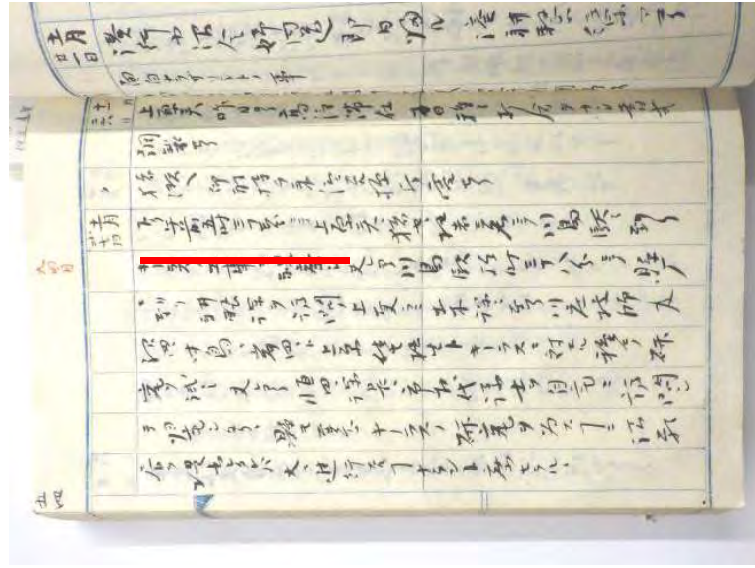
鉄道事業で培われた土木技術が積極的に参照された理由としては、猪瀬蔵太郎や協力者に鉄道事業と縁がある人物が複数いたためと考えられます。猪瀬蔵太郎は大正 3 年から 6 年まで筑波鉄道の取締役を務めており、協力者であった根本正は現在の水郡線の設置に関係しています。これらの人々は当事者として鉄道事業者の土木技術の高さを理解していたものと思われます。また、高浜周辺は常磐線の敷設時に軟弱地盤から難工事となったことが知られており、羽成卯兵衛が地元の出来事として知っていたとしても不思議ではありません。これらのことから、河川周辺などの軟弱地盤を乗り越えて広がる鉄道の技術力を干拓事業に取り入れたものと考えられます。



←高浜駅付近工事

石岡市史下巻掲載

高浜入り部分は想像以上の軟弱地盤であり、当初の計画をはるかに超える量の土砂を投入することでなんとか完成しました。

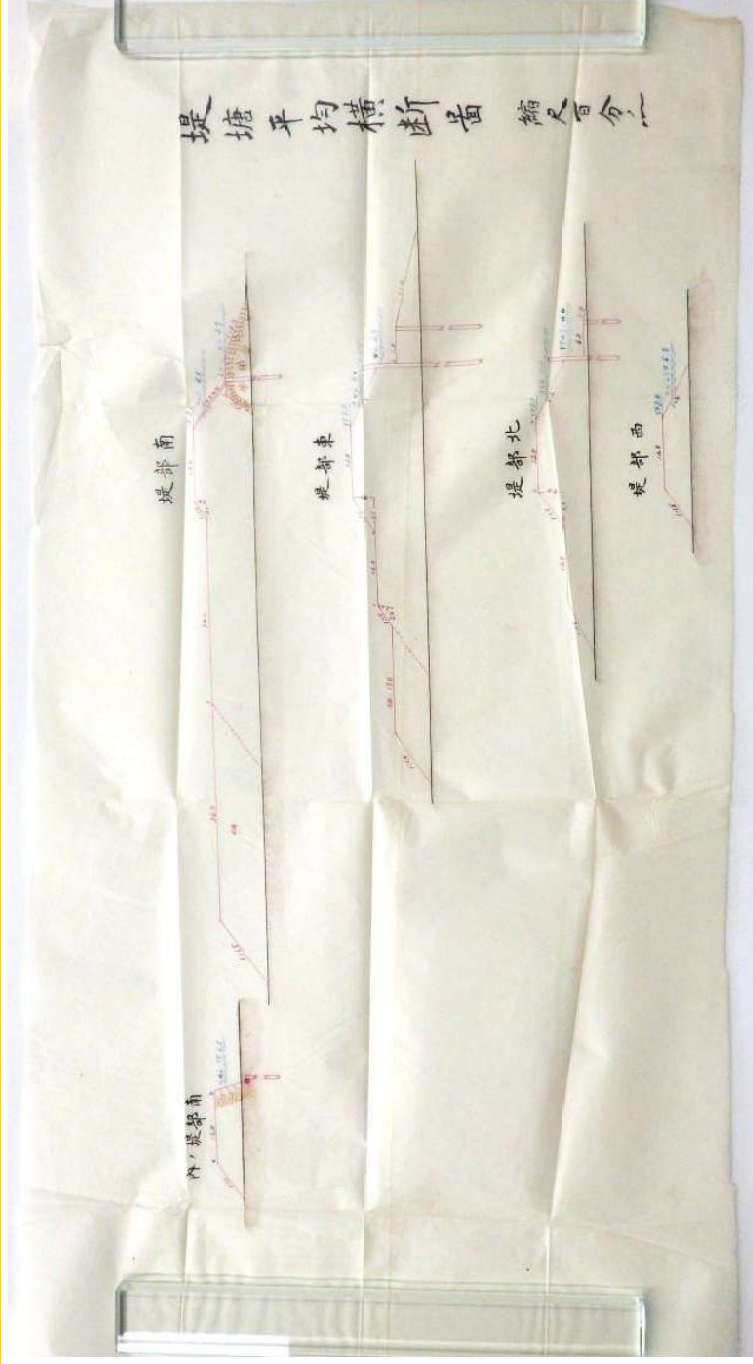


↑干拓事業日誌

大正9年11月27日

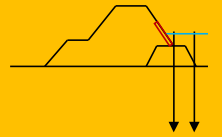
八木の干拓の堤防は上、霞ヶ浦に面し比較的波の影響が強いとされた南東側（上図面の南部堤防）は浸食対策として石やレンガなどを貼り付けを採用しています。また、他所と比べ堤防幅が広く、土砂の流出を抑えるためと思われる石組みの基礎があります。その他の霞ヶ浦に面した堤防は、コストを考慮してか、土砂を積み浸食対策は板柵や土嚢を用いています。

堤防の設計に際しては、技術者の指導を受けた他、県内で行われている工事現場の視察も行い研究されています。



↑堤塘平均横断面 大正後期

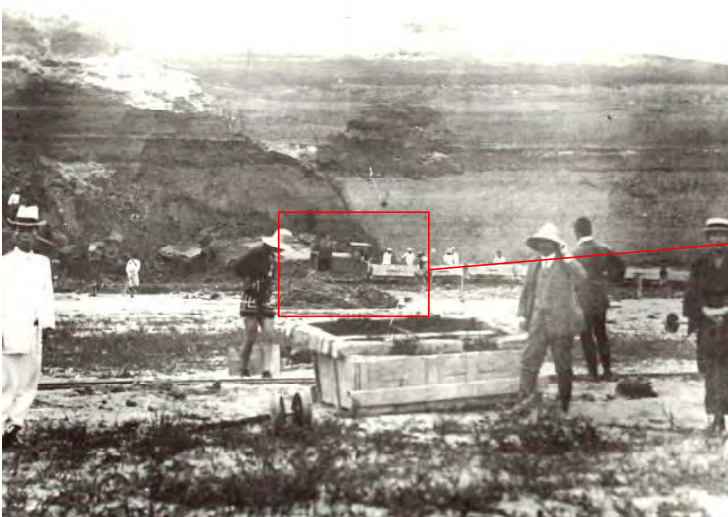
難航する堤防工事



当時の最先端技術をもつ土木事業者の協力を得てもなお、工事は思い通りには進みませんでした。

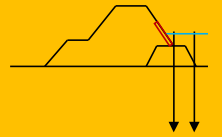
大正11年1月11日に西本組と契約を結び工事が始まりました。羽成卯兵衛自身も作業に参加し杭の打ち込みなどに汗を流しますが、大正11年3月20日には「1号及13号不明 南堤5号6号不明 北堤2号不明」とアクシデントが発生しています。杭の固定がままならない原因は、やわらかい泥が予想以上に深くまで続いていたためであり、対処のために土砂を投入しても水の力で流されてしまいました。

工事が難航する中で頼みの綱となったのが海東惣一郎でした。大正11年4月3日にトロッコ用の線路整備を請け負うと、5月25日に一部堤防工事を、さらに12月1日には堤防全体の工事を請負っています。海東惣一郎が考えた対策は、流される以上の土砂を投入するというものであり、そのために運搬の効率化に取り組みました。対応の第一弾としてトロッコ用の線路を複数整備し、さらに羽成卯兵衛たちと調査を進め当時非常に珍しかったガソリン機関車を導入しています。これにより劇的に作業効率は向上し、ようやく工事は軌道に乗りました。



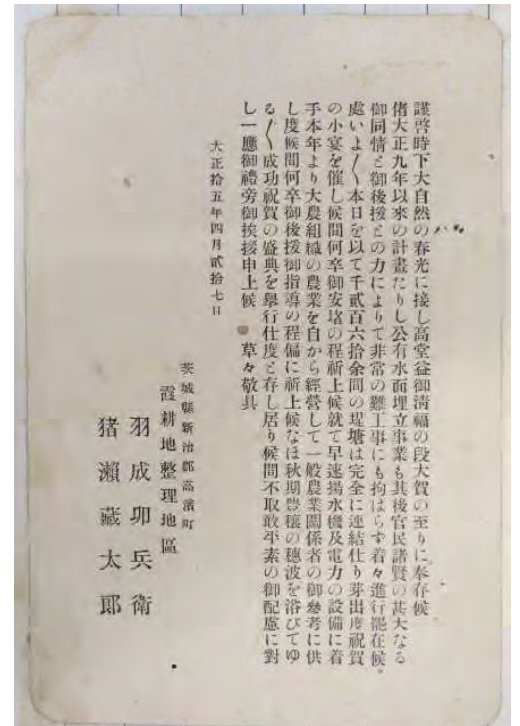
↑八木の干拓に導入された
ガソリン機関車

うれしい最初の田植え

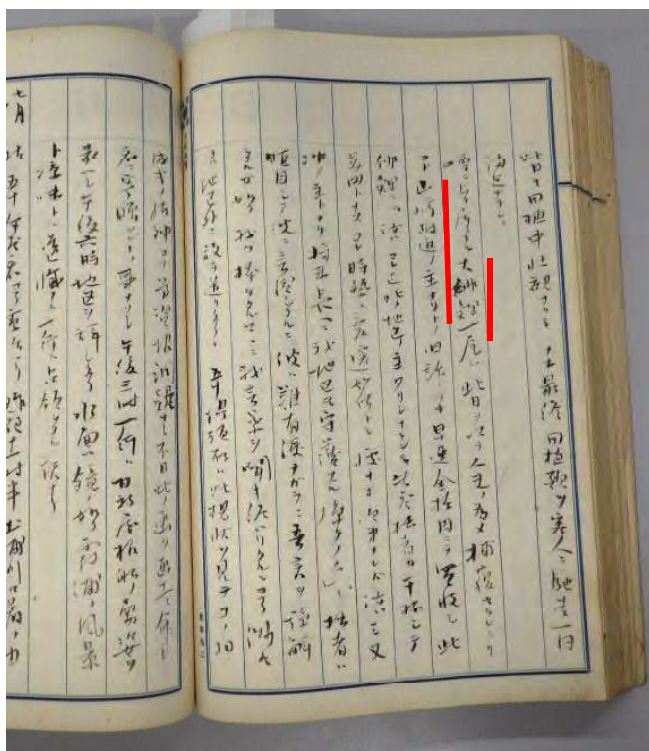


海東惣一郎の活躍もあり大正15年4月27日に堤防が連結しました。当初は大正12年度の工事完了、翌年度からの利用開始という計画で、期間のズレが難工事だったことを示しています。

堤防内部の排水や道路工事等に加え、大正15年6月16日に最初の田植えを迎えました。田植えには7月1日に石岡農学校の生徒300名、7月3日には関川村尋常高等小学校の生徒80名が参加し、7月9日には新治郡農会技師や国民新聞記者などで構成された記者団が取材に訪れるなど注目を集めました。



↑堤防連結を伝える礼状

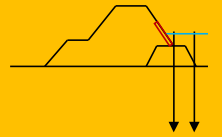


←干拓事業日誌

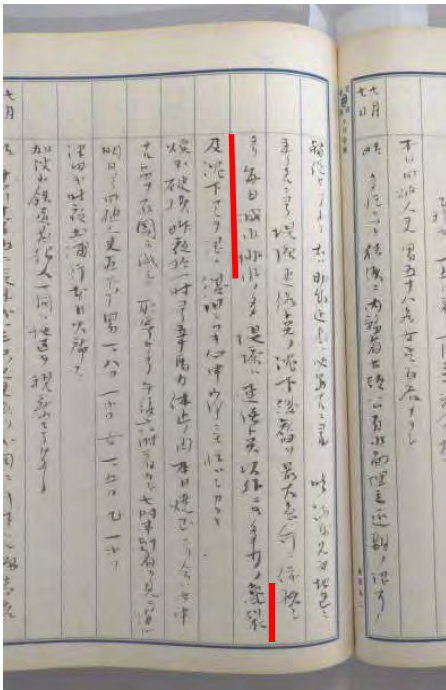
大正15年7月11日

気になる記事として、巨大な緋鯉の捕獲があります。この緋鯉は周辺の主だという話になり、干拓を守ってもらうために霞ヶ浦へ逃がされました。この後も八木の干拓は何度も困難に見舞われますが、今日まで続いているのはこの主が守ってくれているからなのかもしれません。

農地を維持する努力は続く



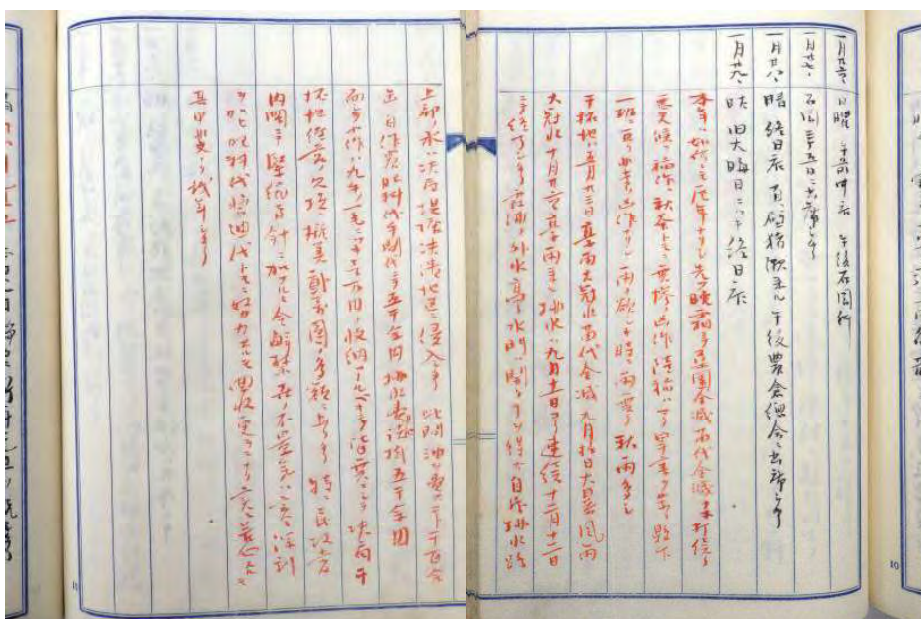
堤防の連結、初めての田植えなど農地として動き始めた八木の干拓ですが、全体の工事が完了するまではもちろん、竣工後も農地を維持していくための努力は続けられました。



↑ 干拓事業日誌

大正 15 年 7 月 7 日

干拓事業日誌をみると、堤防連結からまもない時期でも、すでに堤防に亀裂や沈下といった不調が発生していたことがわかります。大量に土砂を投入するも、軟弱地盤の根本的な解決はできなかったようです。昭和 3 年 7 月には水路の決壊が相次ぎ、大正 15 年に続き堤防の沈下も記録されています。干拓地内に浸水した場合には、内部の水を排水する揚水機がその水で故障してしまい、農地としての維持が難しくなります。広大な霞ヶ浦の水の力は非常に強く、まとまった雨が続く場合には心配が絶えませんでした。



← 干拓事業日誌

昭和 5 年 1 月 29 日

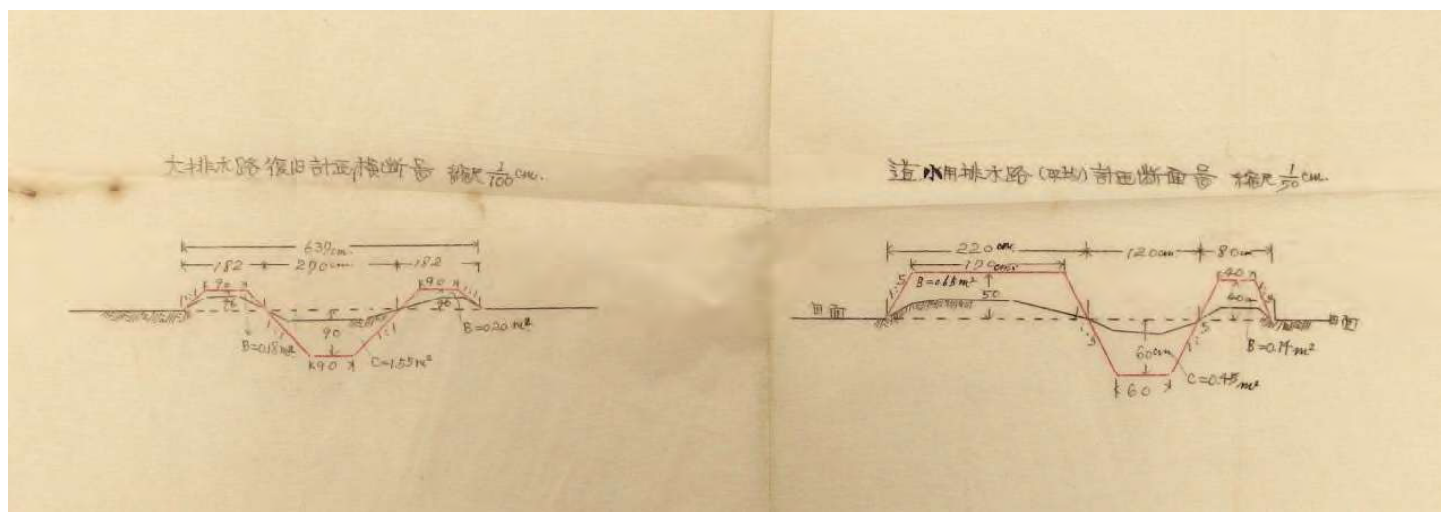
昭和 4 年は干拓地の冠水や堤防の決壊が発生したほか、霜害で苗代に被害が出るなど不運が連続し、「厄年」と表現されています。

不良箇所の修繕などを続け、昭和5年7月5日に茨城県へ八木の干拓竣工の申請が提出されました。後年にまとめられた『霞耕地整理地区の沿革』によれば、完成までかかった費用は83万7959円、当初予算額は24万1174円だったことから約3.5倍にもなっています。茨城県の補助金等が26万7804円支出されているため、差し引き59万6785円が羽成卯兵衛たちの負担した金額となります。これを企業物価指数の変化から現代の価値にしてみると約6億1500万円になります。

また、完成後も安泰ではありませんでした。昭和10年、13年、16年、22年に大規模な水害が発生した他、風雨による堤防等の損壊は何度も起こり、その度に復旧工事を行い農地を維持してきました。今日でも稲やハスの水田が約60haに渡り維持されていますが、その基礎には羽成卯兵衛たち先人の長い努力があることを忘れてはなりません。

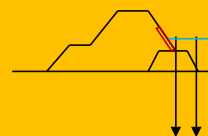


↑ 左. 昭和10年水害の様子 右. 昭和13年水害の様子



↑ 昭和12年3月 水害復旧工事図面

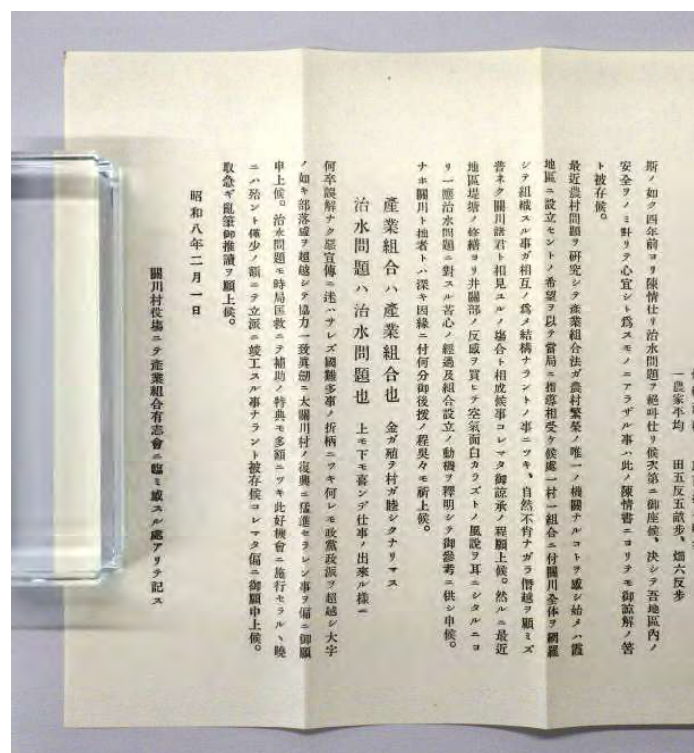
八木の干拓のその後



八木の干拓工事で大きな役割を果たした海東惣一郎は、その後、大正13年に設立された高浜三村耕地整理組合に副組合長として参加しています。高浜三村耕地整理事業も八木の干拓に劣らぬ難工事だったことが知られ、完成まで30年以上の月日がかかりました。さらには、大正15年の^{もとしんしま}涸沼干拓工事、昭和17年の本新島干拓工事など各地の干拓工事を手掛けるなど、八木の干拓の経験を活かし、広く農地の創出に活躍しました。



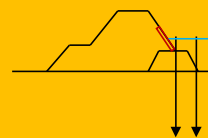
↑ 高浜三村耕地整理
記念碑



▲ 産業組合設立の趣意
昭和8年2月1日

羽成卯兵衛は昭和8年に関川村内に金融サービスや施設の共同設置など様々な役割を果たす信用購買販売利用組合、いわゆる産業組合の設立に奔走しています。この時期は、昭和恐慌で疲弊した農村部などを立て直すため、全国的に農山漁村経済更正運動が展開しており、産業組合の設立はその一環として推奨されました。干拓事業を通して関川村と深く関わっていた羽成卯兵衛は、その後も関川村の発展のために地域の中で活動をしていきました。

おわりに



昨年度、昭和 100 年を迎えたことで全国的に近代の文化財への関心が高まっており、石岡市でも第 41 回企画展「昭和百年」や第 42 回企画展「石岡海軍航空基地を掘る」を開催しました。近代は日本が大きく変化した時期であり、その特徴を表す文化財が各地に残されていますが、土地利用や人・組織の変化により少しずつ失われていっているため、今のうちに調査・記録することが大切です。

八木の干拓は近代日本の社会問題に地域の人物が挑んだ事例であり、またそこから地域の内外に影響を与えていった点で意義深いものです。同様の事柄は市域の各地に残されているものと思われますが、まだ知られていないものも数多あることでしょう。それらを適切に保護し、調査を進め、将来へ伝えていくためにも、皆さんがご存じの「地元こんなところがある」「こんな史資料が残っている」といった情報がございましたら、文化振興課までご提供いただけると幸いです。



↑ 稲・ハス田が広がる現在の八木の干拓

Memo

[illegible]

石岡市立ふるさと歴史館 第45回企画展

開墾奨励ノ熱狂時代ニツキ

令和8年（2026）7月8日発行

編集・発行

石岡市教育委員会 文化振興課

〒315-0195

茨城県石岡市柿岡 5680-1

TEL 0299-43-1111

石岡市立ふるさと歴史館

〒315-0016

茨城県石岡市総社 1-2-10

TEL 0299-23-2398